

巻頭言

社会のニーズに応える 教員の養成を



同窓会長

作野史朗

国家隆盛の基本が教育にあることは誰しも認めている所である。最近の我が国では、教育をめぐる幾つかの話題があったが、そのうち3つに絞って述べてみることにする。

一つは、国立大学法人の文学部・教員養成学部不要論である。いくら国の財政が厳しいからといって、こんな暴論が正々堂々と罷り通る政治の世界、中央官僚の有様に暗然たる思いがする。特に、日本国民としての基本的な人間性・社会性・知識・技能等を習得する義務教育の教員養成は、国が責任を持つべきであることは言うを俟たない。確かに国立大学法人教員養成学部の卒業生が、現役で教員採用試験に合格し、正規教員として採用される数が少なく、多くは非常勤講師で採用されている実情がある。だからと言って教員養成学部廃止は暴論である。ただ、国立大学法人の教員養成大学・学部で教育に当たっておられる先生方には、国民の血税で運営されているのであるから、国民の付託に応え得る教育をしていただくようお願いするものである。

文部科学省では、教職大学院を有する大学・学部へ教員養成学部を整理統合することを目指しているようである。我が三重大学教育学部には教職大学院が無い。東海地方で、教職大学院が無いのは、三重大学だけである。教職大学院については、議論があることは承知しているが、文部科学省が発表する教員採用率ではきわめて高い数値であるから、やはり時代の、あるいは社会の要請に応えうる教育実践力を備えた教員を養成していると受け止められる。

母校三重大学教育学部では、国立大学法人のドン尻ではあるが、平成29年には、教職大学院コースを設置する、との学部長の意見表明をお聞きして、卒業生の一人として胸をなでおろしている次第である。どうか三重大学教育学部が存続するよう先生方が一致協力して事に当たって頂きたい。そのために同窓会はできる限りの協力をさせて戴く所存である。かつては、国立一期校として、全国から優秀な学生が集まり、それぞれの都道府県に帰って、その地域の中心となって教育界を担う人材を輩出した我が教育学部が「昔の光、今いずこ」では困るのである。

二つ目は、教育再生実行会議が、首相に対して、公立の全小中学校を「地域運営学校（コミュニティ・スクール）とする」ことを提言したことである。社会の変化に即した教育の在り方を求める必要性は、多くの国民が認めている所であるが、我が国の場合、政府自体

が混乱しているのではないかと、思われるような事態が生じている。基本的には、文部科学大臣の諮問機関である、中央教育審議会（中教審）がその任に就いているのであるが、これとは別に、臨時教育審議会（中曽根内閣）、教育改革国民会議（小渕内閣）、教育再生会議（安倍第1次内閣）、教育再生実行会議（安倍第2次内閣）等々が設置されて議論をし、答申を出してきているからである。今回の提言は、この教育再生実行会議によるものである。これら諸会議は、首相直属の諮問機関として設置されているので、首相が中教審不信を示しているのではないかと、疑われても仕方がない、という状況である。一方、教育を実践する学校現場では、くるくる変わる学習指導要領への対応だけでも大忙しの状態である。その上、内閣が代わるごとに前述の諸会議が設置され、いろいろな施策が提案されている現状に不安を感じる。

かつて私は、都道府県教育委員・教育長連絡協議会の、国際教育交流団の一員として、ニュージーランド、オーストラリアを訪問し、これらの国のコミュニティ・スクールを視察し、教育委員会や校長、地域住民等から意見聴取を行ったことがある。その時感じたことは、日本とは学校の設置条件や土壌が違う、つまり、日本の公立学校では、学校教育制度は国や地方自治体が主導しているのに対し、これらの国では公立学校といえども、地域住民の要望を生かして学校が作られ、したがって、教員人事一つをとってみても、その学校の運営委員会が校長を含む教員人事や給与を決定している事、また、地域住民が積極的に学校運営や授業に協力している事等々であった。この当時の我が国では、コミュニティ・スクールの導入の可否が議論されていたので、時宜を得た視察であったと思うが、教員人事一つをとってみても、学校側と地域住民側では意見が分かれてくるであろうから、教員・地域住民ともに意識改革が必要で、直ちに導入することは難しい、と感じた。

その数年後、我が国では、コミュニティ・スクールを創設した。例えば三重県でも、津市立南が丘小学校が指定された。現在では全公立学校約3万校の内、コミュニティ・スクールの指定は1,919校にとどまっているのが現状である。導入後10余年を経た現在でも、教員や地域住民の意識改革が進んだ、とも感じられないから、まだまだ紆余曲折があるであろう。しかし、公立学校、特に義務教育の小中学校では、学校が抱えている児童生徒の生活指導上の諸問題の解決もしくは社会生活の基本的態度の教育、科学技術の進歩に対応した教育の推進等に当たっては、すべてを学校が抱えるのではなく、地域住民の協力を導入することは極めて重要なことになってくるであろう。特に生活指導上発生する問題においては、家庭に起因することがほとんどであるから、地域ぐるみで子供を育てる土壌を醸成していくべきである。

三つ目は、今年（平成27年）3月、政府は小中一貫校を新設し制度化することを閣議決定したことである。これは、名称を「義務教育学校」とし、学校教育法の一部改正を図って、できれば平成28年度から実施したいとの事である。義務教育学校は、地域の実情や子供の実態に応じて、カリキュラムや学年制を変更できる、としている。戦後導入された義務教

育6・3制は、その当時はともかく、社会が大きく変化し、児童生徒の発育発達が進んでいる現状からみれば、これは歓迎すべき改革と言えよう。しかし、教員は小中学校の教員免許が必要としていることを始め、多くの課題を含んでいることも事実である。

以上3点に絞って述べてきたが、どれ一つをとっても教員養成の在り方と絡んでくることばかりである。俳句の世界では俳聖芭蕉が唱えた「不易流行」という言葉がある。これは教育の世界でも通用する。人間性を育て、日本国民として必要な知識技能・生活態度を育てる事、学力の基礎基本を身につけさせる事等は「不易」であり、変化していく社会や進歩・発展していく科学・技術に応じた教育をすることは「流行」である。三重大学教育学部がこれに対応できる教員を養成する学部となることを切に希望するものである。

(学芸学部7期1部乙類卒)

大学院改革について



教育学部長
藤田 達生

作野史朗会長をはじめとする同窓会の皆様には、常日頃から大変お世話になっています。無事、2期目を迎えました。近況としてご報告しなければならないのが、本年度から大学院で「教職実践プログラム」が開始されたこと、および平成29年度に教職大学院を設置することになったことです。

三重大学教育学部においては、かつて平成19年に学部規模で教職大学院に関する議論を重ねた結果、設置を見合わせるようになったという経緯があります。当時、教職中心の人事構成への転換（11人以上の担当教員が必要で、4割以上の実務家教員が含まれる）や小学校教員養成への重点化に関する可否が大きな焦点になりました。教員数が100人を割り込む本学のような小規模教育学部にとって、教職大学院設置は荷が重すぎたのです。

またデータの的にも、三重県では大量の教員需要が予想されていたことにもよっていました。たとえば、全国都道府県別に平成5年度から平成31年度までの16年間の教員需要推計を行った研究によると、三重県は全国第3位の教員需要が見込まれるとの試算がありました。

それから8年を経過した現在、教育学部を取り巻く環境は大きく変化しました。たとえば、三重県では小・中学校教員の大量採用のピークは平成26年の435人とみられており、10年後には緩やかではありますが減少へと転じると予想されています。

あわせて少子化が進むなかで、小・中一貫教育の推進に伴う学校の統廃合が加速し、さらには18歳人口の減少も手伝って、近い将来における教育学部の学生定員の削減すら予見されるようになりました。

このような事態に直面する前に、適切な対応策をとらねばなりません。そこで全国の教職大学院の実態を調査すると、教頭や校長などのスクールリーダーの育成よりも、ミドルリーダーの養成やストレートマスターに対する実践力の向上をめざしたカリキュラムへと変更されていることがわかりました。

かような現状認識のもとで検討したのが、ミドルリーダー育成による附属学校の機能強化です。地域の学校現場の教育水準の向上を引っ張るのはミドルリーダーです。ついては、やる気のある中堅クラスの学校教員を附属学校に赴任していただき、働きながら大学院で学べるシステムを構築することをめざし、交流人事の活性化を図りたい。すなわち附属学

校の高度教員研修のための大学院化こそ、有効な生き残り策になると考えたのです。

平成25年6月教授会で学部執行部と附属学校園長・副校園長を中心とする大学院・附属学校活性化委員会を設置して議論を重ねた結果（2年間で17回もの委員会を開催しました）、平成26年10月教授会において、附属学校教員をその勤務にありながら大学院生として教育しミドルリーダーに育成するための教職実践プログラムを、平成27年4月に設置することを決定しました。その結果、現在は附属学校園から各1人合計4人の教員を大学院生としてお迎えしています。

本プログラムは、検討を続けてカリキュラム改革をおこない、平成29年4月には「教職実践コース」とすること、あわせて文部科学省からの強い要請を受けて教職大学院を設置することになりました。

近い将来の教育学部においては、学部教育から大学院教育へ、教員養成から高度教員研修へと、比重を移してゆかねばならないでしょう。そのためには、大学院についてはeラーニングなどICTを活用し、県内どこの学校に勤務しても働きながら学べるシステムの構築が前提となります。また院生の内訳は、現職教員が過半数を占めることになるであろうと予想されます。

教育学部・教育学研究科は、大きく変わろうとしています。ご支援のほど、お願い申し上げます。

同窓会・会員だより



昭和23年卒
中川 健一

ああ この契り

山なみ碧き 布引きよ

海原つづく 阿漕浦

白亜の殿堂 揺ぎなく

学びの舎を 後にして

勤め励みし 幾歳ぞ

送りし青春の なつかしく

ああ同窓の この契り

結ぶ絆よ 永久にあれ

明るく微笑み 手をとりて

巡る想いの 糸車

相依る友と 手繰るとき

一途に教えし 我をみる

交す友情の 温もりに

明日への希望を つなごうよ

ああ同窓の この契り

固い絆よ 永久にあれ

支部だより 北から南から

桑名1 (旧桑名市) 支部 会員の皆さんより

写真 Photo



昭和 38 年卒
大寺 正文



【題名】 付近の野鳥 冬の来訪者 コハクチョウたち

木曾三川が流れ込む愛知岐阜三重の県境地には、冬になると北風によって“コハクチョウ”たちがやってくる。

この地は、コハクチョウたちが、自ら見つけた越冬地なのだろう。もちろん観光地でもなく、餌付けなどされていない。多い年は、飛来30数羽を数える。

写真は、突如飛翔してきたコハクチョウたちを、準備そこそこ手持ちでシャッターを切った時の一枚です。



槌 音



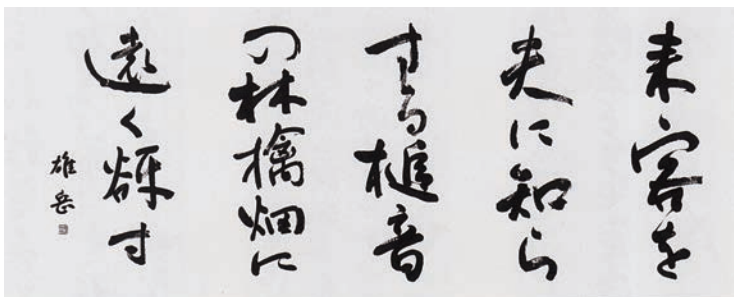
昭和 40 年卒
畑中 裕

わが生き甲斐は書なり。懐かしき大学在学中、田畑昭典先生の薫陶を受け、多くの先輩諸氏、近藤君、出岡さん達と、その魅力に引き込まれ、五十年以上経た今も、新書派協会総務大隅翠苑先生の下、どっぷりと漬かっている。一方、短歌は、水谷一楓先生の下、その奥深さに参り、今日に至る。

錦秋の高山。爽やかに晴れし早朝。ふと立ち寄りし林檎園。見事なる林檎、撓わに実りて、朝光を受け、輝く。

訪へば、白髪の老婆現れて、園主を呼ばんと、吊るされし厚板を持ちて、木槌にて思ひ切り打つ。その乾きし音、林檎園を通り抜け、辺りの山々に響けり。遙か彼方に、檜ヶ丘屹立す。

趣味を生き甲斐に、残されし人生を楽しみたし。鈴木君の推薦に感謝す。



自作の歌 畑中雄岳



市松人形に出会って



昭和 48 年卒
竹村 典子



退職後すぐに、津市在住の人形作家のお宅で初めて市松人形と出会った。写真では見たことがあったが、本物に触れたのは初めてのことで、すぐに心奪われた。いわゆる一目惚れ。すぐに、人形教室に入ることにしたが、全くの初心者で、その作業工程や材料すら知らなかった。優しい先生の「簡単よ。」の一言をそのまま信じて始めてしまった、無謀な入門であった。

しかし、“簡単”ではなかった。始めてすぐにそれを知ったが、すでに原型にとりかかっている、引き返すことができなかった。同時期に始めた方もいて心強くもあり、ふたりで励まし合ったあつという間の3年間であったように思う。

もともとパッチワークや縮緬細工を趣味として続けていたこともあり、なんとかなるという気持ちもあった。しかし、市松人形作りは思った以上に手間のかかる作業で、今までの手芸の世界を超えた職人の世界であることが分かってきた。それでも自分の人形を作りたい一心と、先生のお人柄にひかれての教室通いであった。先生は

人形だけでなく、犬篋（犬が伏した形に作った雌雄一對の小箱）や貝合わせ（平安時代から伝わる蛤の貝で作った遊び道具）を作られる県内でも珍しい人形作家である。人形教室では、日本の文化を知るための願ってもない機会となった。

それからは徳川美術館や、旅行を兼ねて人形博物館や美術館へ足を運ぶことが多くなったことも、自分の視野が広がったようで嬉しいことである。

今はこの3月ようやく出来上がった人形に着せる着物作りに精を出している。もともと市松人形は、女兒の遊び道具でありながら着物作りの練習台となったものであるため、当然のなりゆきである。86歳の母親の助言をもらいながらなんとか着物を着せて完成としたい。

次は、何に心奪われるのか楽しみでもある。

南牟婁支部 会員の皆さんより



三年過ぐ 被災地に揺る 秋桜



昭和 36 年卒
須崎久美子

2014年9月4、5、6日 三重県退女教は、中山加代先生を団長に47名の福島支援ツアーが計画され、私もその一員として参加させていただいた時の句を選びました。

震災後三年、今だ帰宅叶わぬ我が家、数多くの雑草が茂る中、コスモスが風に揺れている、哀しさや淋しさを胸に今も生活を営まねばならない。そんな気持ちを句にしました。



老後の彩り



昭和45年卒
中山志津代
(南)

「なんて甘くて儂げな音色なんだろう。」

大学に入学してすぐのオリエンテーションで聴いたマンドリンの演奏に、すっかり魅了されてしまいました。そして、その場でギタマンへの入部を決意しました。音楽的素養のない私に、先輩たちはドレミの弾き方から優しく教えてくださいました。毎日毎日が楽しく、あっという間の4年間。卒業し、就職、結婚、出産と目まぐるしく月日は経ち、楽器は押し入れの中で眠っていました。19年前、子育ても終わり、時間に余裕のできた頃、他大学の経験者と、サークルを立ち上げました。市や町の音楽祭、福祉施設の慰問、地域の集まりなどで演奏しています。下の写真は、紀南病院ロビーでのクリスマスコンサートです。看護師さんのコーラスと共に、患者さんや地域の人に聴いていただきました。

ふたつ目の趣味は洋裁です。家庭科を専攻しましたが、薄田先生にはしごかれまして。夏休みの宿題として、洋服の衿やポケットなどの部分縫い約50種類が出され、本と首っ引きでミシンに向かいました。この作品集は、今でも大切に手元に置いてあります。おかげで、どんな洋服でも、本を見れば作れるという自信がつかしました。今では、最も感謝し尊敬する薄田先生になりました。遠くに住む娘や孫からの注文を受けては作り、重宝がられています。老後の生活を彩ってくれている、マンドリンも洋裁も、大学時代に出会えたことは幸運でした。

さて、私たち18期家庭科は、卒業後、同級会を「のぼら会」と名付け、20数回開催してきました。県内はもとより、大分、東京、静岡、京都、愛知などでも開かれました。会うと、旧姓で呼び合い、すぐに学生の頃に戻れるような気がします。皆で一緒にお風呂に入り、夜はひとつの部屋に集まって遅くまで話し込みます。それぞれの自立した女性の生き方や考え方に共感したり、教えられたり、誇りに思える仲間です。去年は「花子とアン」を朝食時に見て、「ごきげんよう、さようなら。」で別れて、また今年もまもなく再会の時がやってきます。

最後に、老後の生活を楽しくしてくれるには、友の存在も大きいです。20代の頃に勤めた、県最南端の成川小で出会った親友たち。ずっと一緒に遊び、話し、支え合って過ごしてきました。今でも会って、おいしい物を食べて、おしゃべりして、大笑いをする、また活力が湧いてくるのです。



楽しく泳ぐってすばらしい



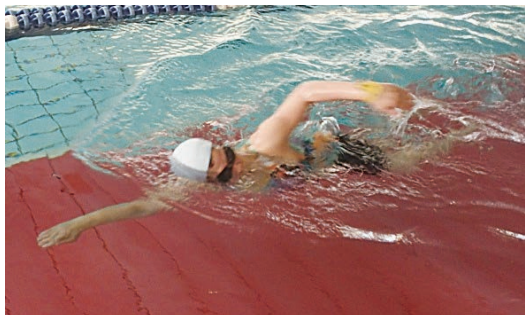
昭和53年卒
南 美重

定年より1年早く退職を考えていた私は、都合の良いその後の人生計画を立てていました。夫にもう少し働いてもらって自分はいままでできなかった好きなピアノを弾いたり、スポーツジムに通って水泳を思いっきりやったり、健康な体を手に入れようとしていました。

ところが、夫が倒れ、また両方の母親のお世話をさせてもらうことになる、忙しさの中で本当に自分のできる、また譲れない部分何なのかがはっきりしてきました。やはり今まで二の次にしていた自分の

健康です。水泳は6年ほど前からやっていたのですが、水泳指導に生かすことぐらいのことしか考えていませんでした。夫の体力の回復も兼ねて、退職を機に、もっと積極的に泳ぎ始めました。

ジムのいろいろなクラスに入ってみました。初心者のクラスは、けのびから始まって、キック、手のかきと続いていくのですが、みんな和気あいあい楽しく泳げます。前回よりも少しでも良くなったところに気が付けばお互い励まし合い、老いも若きも真剣です。一生懸命泳いだ後は、ストレスも吹っ飛びます。それに顔と水着の色やキャップの色は覚えているのですが、名前も職歴も知りません。だれもあえて知ろうともしません。たえず自分の立場、行動の是非を問いながらきた私には、水泳の上達はともあれ、自由にのびのびと心の開放ができることが幸せです。



今度は、上のクラスにも入ってみました。そこでは、静かな競い合いがあります。しかし、苦しいこともあります。確実に泳ぎの向上が見られます。自主練習もやり、今度はこれを頑張ろうという目標が出てきました。今はバタフライに挑戦中です。

冬にはいつも悩まされた咳も少なくなり、腕力がついて、郷里に戻ってきてくれて同居をしている息子夫婦の孫も、しっかり抱けるようになりました。



癒しの地「熊野」へおいでください



昭和59年卒
藤根 正典

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録されて11年目を迎えました。

昨年は私の住む紀宝町を始め東紀州は、熊野古道世界遺産登録10周年の記念イベントがたくさん開催されました。高速道路が熊野市まで開通したことも重なり、過去最高の42万8,698人が熊野古道伊勢路を訪れました。

紀伊山地にはそれぞれ起源の異なる「吉野・大峯」、「熊野三山」、「高野山」という三つの山岳霊場と、そこに至る参詣道が生まれ、京の都、江戸を始め全国から人々が訪れました。熊野古道伊勢路は、伊勢神宮と熊野三山を結び、「伊勢へ七度、熊野へ三度」と呼ばれた信仰の道です。熊野灘を望む峠道、石畳や竹林の道、千枚田を望む道、熊野川を辿る道など、熊野の自然と文化、歴史を感じることでできる観光スポットといえます。

教職を離れ地方議会に身を置き活動する私は、ぜひ多くの方に熊野にお出でいただき、そのすばらしさを、五感で感じてほしいと思っています。

杉や檜、シダの林内に続く苔むした石畳の馬越峠、落ち葉を踏みしめながら竹林の道を歩く波田須の道・大吹峠、鬼ヶ城直上七里御浜の遠望が素晴らしい松本峠などが有名ですが、一つ一つの峠道は独特の歴史や風景を見せ、静寂さと相まって旅人の心を癒やします。

熊野古道伊勢路が、古（いにしえ）からの癒しの道として人々に親しまれ存続していくために、保存会の皆さんや語り部の皆さんががんばっています。古道の整備・保全とともに、若い人たちに地元



てきました。私も「熊野人」の一人として、これからともに活動していきたいと思っています。

今年が高野山開創1,200年にあたります。まだまだ今年も紀州・熊野は注目の的。

古道を歩き、自然と歴史、おおらかな熊野人の人柄に触れ、おいしい魚に舌鼓を打ち、体中で熊野を感じ、ぜひおいでください。



南からの便り



昭和60年卒
西尾 潤一

平成26年4月、教頭として南牟婁郡御浜町立御浜中学校に赴任しました。仕事の内容が全く変わったこと、御年五十を超えてのひとり暮らし、気候風土やことばの違い、そして何より知っている人がいないというアウェー感。面食らうことがなかったと言えばウソになります。

いざ勤務してみると、また驚き！この地域は、先生方お一人おひとりのプロ意識が非常に高く、管理職が助けに出たり、お願いしたりということはめったにありません。小規模な学校が多いことあるのですが、若い方々まで非常にしっかりとした先生ばかりで、自主自律の気風の高い地域なのです。

当然ですが、教諭と教頭とでは仕事が全く違います。7時に宿舎を出て21時に宿舎に帰る日々が続きました。夜空が美しすぎて、悲しくなりました。酒の量が劇的に増えました。リタイアしてしまうのではという予感もしていました。

しかし！慣れとはオソロシイ。失敗ばかりだった朝晩の手料理も、梅雨入り前には見事P D C Aサイクルに乗っかりました。(夏休みに遊びに来た息子が、私の手さばきを見て目を丸くしました。)休みの日は「今日も南紀に観光だ！」とばかりにあちこちを訪ねて回り、魚料理を食べ漁る。お盆も滞在、校庭の木々を剪定して、すっかり木こり状態。二学期になると、平日だというのに隣の学校の教頭先生と連日飲み歩くということまでありました。指揮台の上で怒鳴り続けていた30年の方が幻だったのでしょうか？

まもなく御浜中での二年目の勤務に突入します。せっかくの広域人事です。少しは余裕ができましたので、私が津市で得た経験を、少しでも伝えることができればと思います。

最後にPRをふたつ。

御浜町は「年中みかんがとれる町」です。社会科の時間に、「日本の農家の中には、外国との価格競争ではなく、品質で勝負に出る農家がある。」と教えた記憶があります。御浜町のみかんもそれです。美味しいみかんが何種類もあります。お立ち寄りの際はぜひご購入を。できれば農家と年間契約を！

そして「風伝おろし」をご存じでしょうか。御浜町尾呂志地区の秋の風物詩です。朝霧が山の斜面を滝のように流れ落ちる光景、ぜひ一度ごらんください。



風伝おろしの風景



子どもといっしょに楽しむつもりで



平成7年卒
大久保敦史

教員生活20年目を迎えました。平成26年度から、南牟婁郡御浜町立神志山小学校に転勤しました。全校児童40人ほどの小さい学校です。三重県南部の東紀州地方は、どこも自然豊かな地域ですが、そんな中でもひとときわすばらしい環境が、ここにはありました。

春にはたくさんの桜が咲き誇る中、新学期が始まります。5月頃から、学校の裏山では、子どもたちは楽しみにしているビワやグミ、ヤマモモなどが実をつけます。あと少しでおいしく食べられそうなビワを、山に住むサルたちに食べられてしまい悔しい思いをしたりします。また、同じ裏山で収穫した梅の実を梅干に漬けて、給食の時に食べたり、地域の人に配ったりします。

夏には、川遊びや魚釣りを楽しめるきれいな川があります。学校の職員駐車場の脇を流れる水路では、夜になるとホタルが見られます。

秋には校庭や山の木々が美しく紅葉し、低学年の子どもたちは、登校途中にたくさんのドングリを拾ってきます。学校の畑でとれたサツマイモを、焼き芋にしてみんなで食べます。

冬には裏山の山道を使ってウォークラリー大会をします。子どもたちは、生えているシダを組み合わせて作った帽子や首飾りを身につけ、楽しそうに歩いています。

神志山小学校の子どもたちは、季節の移り変わりや生き物の生命力、自然の恵みなどを、常に身近に感じながら生活しています。子どもたちの育ちのために、これだけの自然環境がそろった学校も珍しいのではないのでしょうか。

せっかくの、この宝物のような環境を、学校教育の中でいかすためには、教師自身にも、自然の中のふとしたことに心を留める感性や、それを楽しむ心のゆとりが必要なのかなと思います。慢性的に多忙で、追い立てられるように仕事をしている毎日の中、そのようなことは少し忘れかけていたような気がします。

今年の自分のテーマは、学校の豊かな自然環境を、「教えるよりも、子どもといっしょに楽しむ」で、いこうと思います。



桜がきれいな神志山小学校

大学院教育学研究科に学んで

「出会う」経験の積み重ねから

三重大学大学院教育学研究科
教育学専攻・学校教育領域2年

西川 佳那



皆さんは、「幼児」と聞いてどのような姿を思い浮かべるでしょうか？多くの方が遊んでいる姿を思い浮かべるのではないかと思います。しかし、幼稚園や保育園で園児たちがただ「遊んで」いるわけではありません。彼らは遊びながら、日々の生活の中でいろんなことを体験し学んでいるのです。例えば、遊ぶ中でルールがあること、ルールを守ることを学んだり、自分たちで遊びを考えて発展させたりします。表情も「笑う」「泣く」「怒る」と、単純ではありません。悔しくて泣いたり、上手く出来ない自分に怒ったり、そういった複雑な気持ちも抱えています。このように毎日変わる子どもたちの姿に魅了され、私は、この時期の子どもたちについてもっと観てみたい、もっと一緒に感じたい、と思うようになりました。

私は現在、幼児期の子どもたちの仲間関係について興味を持ち、研究を進めています。

大学院では、現場経験のある先生方も学んでいるので、実際の現場の様子を聴くことが出来ます。一緒に授業も受けるので意見の交流も多く、刺激を受けながら自分の視野の広がりを感じています。他校種との交流が話題になる中、こうした経験が出来ることは大学院での学びの強みと考えます。

この一年は、より多くの子どもたちに触れてみたいと思い、自主実習やボランティアに参加するようにしました。また、学部の頃から継続して「ぞくよん」という三重大学内のボランティアサークルにも参加しています。三重大附属病院の小児病棟で、入院中の子どもたちと一緒に遊ぶサークルです。日々の遊びの時間だけではなく、病棟夏祭りなどのイベントにも参加しています。一緒に遊ぶ中で、子どもたちの笑顔を見ることが出来、やりがいを感じています。年齢や環境の違うたくさん子どもたちに触れる経験が、自分の考え方を豊かにし、将来の自分の糧になっていることを実感しています。一緒に笑ってくれる子どもたちに感謝しながら、残りの一年も研究に実習に日々精進していこうと思います。



大学院へ進んで

三重大学大学院教育学研究科
教育学専攻理数・生活系教育領域2年
端 崎 裕太朗



私は、学部3年次の教育実習で子どもたちと関わりあい、中学生のころからの夢であった教師になろうと思いました。しかし4年次での教育実習の時にうまくいかず、教員採用試験もうまくいきませんでした。「自分には教師は向いてないのかもしれない」と考えるようになったのもこの頃からでした。卒論に取り組んでいくうちに、このまま講師になって通用するのだろうかと思い、この時には教師以外の道を探すことも視野に入れ大学院の受験を決めました。

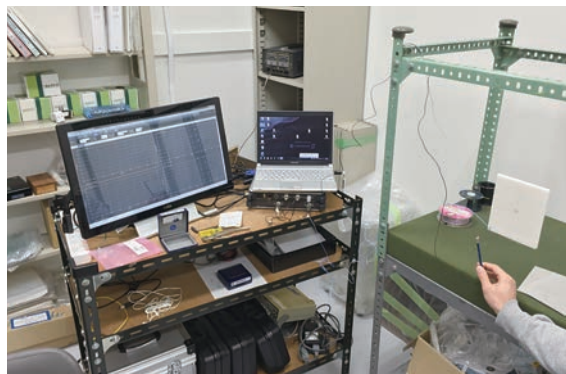
大学院では、学部の時より自分の考えた授業や教育に関する考え方などを発表する機会が多く、今までよりもしっかりと自分の教育観を練ることができます。その中で私は授業をしっかりと考えたり、多くの公開授業に参加させて頂いたりする中で、楽しいという気持ちと一緒に徐々に学部の頃の「教師になりたい」という気持ちが膨らんできました。研究や課題で忙しいですが無事に三重県の教員採用試験に合格することができました。ものづくりの楽しさを伝える教育ボランティアでは、大学院生として教師の方と話し合ったり、学部生にアドバイスを行ったりと今までとは異なった新鮮な立場で教育ボランティアに参加することができました。

研究について、私は、機能性繊維強化複合材料の振動減衰特性の評価を企業と合同で研究しています。耳慣れない言葉ですが、航空分野やスポーツ分野など身の回りのあらゆるものに使用されています。教育学部の人間なのに機械系工学に関する事なので、初めは、



わからないことだらけで戸惑いましたが、技術の教員になるにあたってものづくりの最先端に触れることのできる素晴らしいチャンスだと思い日々研究に励んでいます。

大学院生は、学部の時と違い、教授方も一人の研究者として接してくれます。学部生のゼミ指導や学会発表など責任を伴うことが多くなり、プレッシャーに感じることもありますが、自分の今後の人生に大きなプラスになっていると思います。また、大学院に進むメリットの一つに教員採用試験に1年次に合格すると1年間採用を留保することができる事が挙げられます。その1年間を利用して、今後は先に就職していった他の同期たちにはできない、落ち着いた環境で研究や自己のスキルアップに臨み充実した大学院生生活を送っていきたいと考えています。



新人の声

NEW FACE VOICE



みえだいに

平成26年卒 中瀬 葉月

私は昨年の4月から木本高校で数学の教師として働いています。場所は熊野です。七里御浜の海岸がすぐそこにあり、海がとても綺麗です。夏には全国でも有名な熊野大花火大会が開催され、たくさんの観光客が訪れます。また熊野古道もたくさんあり、山にも囲まれています。ひとことでいえば、「田舎」で教師をしています。1年を終えようとしている今、一番感じることは、自分の力不足です。教科指導も生徒指導も、「うまく伝わらない」と思うことのほうが多いです。1年目の教師も、20年目の教師も、生徒から見たら同じ「先生」

です。同じレベルのものを求められます。それに答えてあげることができず、何度も申し訳ない気持ちになりました。しかし落ち込んでいる暇はありません。ある日廊下ですれ違った男子生徒に「先生、ばり疲れたーるやん」と言われました。方言に慣れていなかったのですが、すぐに理解できませんでしたが、「とても疲れているね」という意味です。何気ない一言でしたが、暗い顔をして廊下を歩いている自分に気づかされました。また生徒は教師のことをよく見ているのだと感じた出来事でもありました。うまくいかず自信をなくしていたときでしたが、それをきっかけに「暗い顔している場合じゃない」と思いました。うまくいかないことの方が多いですが、明るく前向きになろうと思えました。これからも自分の精一杯を尽くして、生徒と向き合っていこうと思います。



現場での経験

平成26年卒 辻村 健彦

現在私は、三重県の県立学校で期限付き実習助手という仕事をしています。実習助手というのは、理科などの実習の授業の際に授業者の先生の補助というかたちで授業に入ったり、実習の準備をしたりする仕事です。本来は理科の実習助手なのですが、勤めている学校が総合学科なので、理科、家庭、福祉の授業に入っています。3教科とも教員免許を持ってなく不安でしたが、専門的なことは授業者の先生が教えてくれますし、授業前に授業者の先生と打ち合わせも行うので、今では少し余裕をもって授業に臨むことができます。

部活動では野球部の副部長をさせてもらっていて、日々生徒たちを指導しています。本校の野球部は現在部員が7名と少ないので、練習試合をする際にも引退した3年生に来てもらったり、時には教員が出たりと、今

までの自分の経験からでは考えられないようなこともたくさんあります。そのような厳しい環境でも毎日練習に取り組む生徒たちを指導するのはとてもやりがいがありますし、私自身もとても勉強になります。

私は保健体育科の教員志望なので、講師登録も保健体育科のみ行っていましたが、志願者数が多いため、講師の枠がありませんでした。そこで教育委員会の人事担当の方から話をいただき実習助手をすることになりましたが、話をいただくまでは実習助手という仕事があることさえ知りませんでしたし、希望通りの講師ではなかったので少し気が進みませんでした。しかし、常勤なので生徒と接する機会も多く、今まで知らなかった教師という仕事の大変さややりがいを知ることができました。非常勤講師は部活動の顧問をもつことはありますが、基本的には授業だけを行い校務分掌もないので、自分の専門教科を教えたいという気持ちはありますが、常勤として勤めることができたことは本当に良かったと感じています。実習助手という仕事から多くのことを学び、今後の自分の力にしていきたいと思っています。



教師生活一年目

平成26年卒 溝口 篤輝

私は今、四日市市内の小学校で勤務しています。私は、4年生の担任として、子どもたちとの日々を過ごしています。教師一年目の私は、わからないことばかりで、毎日必死に取り組んでいます。わからないことや失敗も多いですが、そんなときには、いつも周りの先生方が声をかけてくれて、助けてくれます。そんな先生方のおかげで、私は何とか教師として子どもたちと過ごすことができている。

学校生活での一番の楽しみは、給食です。子どもたちと楽しく話をしながら、たくさん食べます。子どもたちは私を見て「先生が食べるとおいしそう。」と言ってくれます。子どもたちも、4月当初に比べ、たくさん食べられるようになり、残飯が少なくなりました。みんなで食べる給食はおいしいなといつも感じています。

私は、子どもたちがとても魅力的な存在であるといつも感じています。何事にも必死に取り組む姿、夢中になって遊ぶ姿、友だちを思いやって声をかける姿な

ど、子どもたちの姿を見て、いつも温かい気持ちになります。そして、私は、そんな子どもたちのために頑張ろうという一心で日々を過ごしています。子どもたちと過ごす中で、困ることや悩むことも当然ありますが、子どもたちが楽しそうに笑っている姿を見ると、悩み事も忘れて自分も楽しい気持ちになってきます。子どもたちの力を感じながら、日々取り組んでいるところです。

これから、大変なこともたくさんあると思いますが、子どもたちのために取り組んでいこうと考えています。また、私も教師として、子どもたちと共に成長していきたいと思っています。



教職支援室からの報告

教職支援室と連携支援室 (平成27年度より名称が教職支援 センター学校連携支援部門に変更)



昭和47年卒 金子 滋 朗

連携支援室は、大学と隣接校区学校園と附属学校園との連携による教員養成を支援する教育機能を果たすために、平成24年度に発足いたしました。附属との連携を主にした連携室Ⅰ、隣接校区学校園との連携を主にしたⅡに分かれています。その担当として学部卒業生で、退職したもの2名が在職しています。

連携室の任務としては、教育実習時に附属学校園や隣接学校園との連携を図ることが求められ、実習時に発生する諸問題を大学と共に解決したり、学生の様子等の情報交換を実施したりしてきました。従前から設置されている教職支援室とは異なる目的を持っておりますが、学生たちにとって二つの支援室

は必要なものと考えられます。

学生が社会人となって巣立つとき、どんな力をつけていくのか、どんな力をつけていかなければいけないのかを探った時、採用試験に向けて様々な対策が必要です。学生たちは教職支援室の行う採用試験に向けた面接練習、模擬試験等を受けていきますが、その時、附属学校園や隣接校区学校園で実施した、教育実習や教育ボランティアの経験が生きてきます。

採用試験に向けて様々な指導をするとき、その学生がどんな経験を積んできたのか、どんな考えを持っているかによって、その中身やアドバイスの仕方も違ってきます。そこで連携支援室と教職支援室が協力をしあい、連絡を取り合って指導、助言すれば、さらなる、採用試験合格率アップを目指すことができます。

連携支援室が設立されて、3年目が終わろうとしております。設立の目的を達成するため、両者が協力していくことの大切さが感じられる今日この頃です。

同窓生の皆様には、両支援室のご理解をいただき、ご指導を願えれば幸いです。

教職への道…

=教員を目指す後輩に伝えたいこと=



平成27年卒 真弓 侑子

教員採用試験を振り返ってみると、家族・友達・先輩・先生方などたくさんの人の支えがあってここまでこれたのだと強く感じます。私は教採ぎりぎりまで何度も教採セミナーに足を運びました。特に、集団討論の練習には何度も参加しました。初めのうちは、他の人に見られながら討論をすることに照れくささやためらいがありましたが、何度も練習をすることで、自分の意見を述べる際のコツや知識を身に付けることができ、教採本番でもきちんと意見を述べる事が出来たと思います。教採セミナーは、友達から学ぶことがたくさんあり、教採へのモチベーションを高める場所となりました。このような貴重な場所を設けてくださった教職支援室の先生方には本当に感謝しています。また、教職支援室の先生方は、時には「もっと頑張らなアカんで！」と厳しく指導して下さいたり、時には優しい笑顔で「大丈夫。」と

励まして下さったりと、いつも私たちが温かく見守って下さいました。教採に関して分からないことがあった時には、丁寧に教えて下さいました。後輩の皆さんにも、教職支援室をおおいに活用して欲しいと思います。

私に教職を目指すきっかけを与えてくれたのは、中学校の時に会った先生です。厳しい方で、その先生の授業前には憂鬱すぎてお腹が痛くなる友達もいました。しかし、その先生の授業は分かりやすく、「英語って面白いな」と思えるだけでなく、家族や友達に感謝することの大切さなど様々なことを教えて下さいました。また、授業外ではどんなに忙しくても私たちの質問に答えて下さるとても親切な先生でした。私はこれから、分かりやすい授業が出来る教師、コミュニケーションを大切に、周りの人と協力して子どもたちを見守ることのできる教師になりたいと思います。そのために、周りの人から謙虚な姿勢でたくさんのことを学んでいきたいと思えます。不安や心配もたくさんありますが、教育学部で出会った仲間や先輩方と共に教育の現場で頑張っていきたいと思えます。